沈黙に向き合う〈10〉

沖縄戦 聞き取り47年

石原 昌家

伊是名島虐殺事件 ②

「指導者に裏切り者」

脅迫機に、真相に迫る

伊是名島虐殺事件の聞き取り調査をしているとき、事件のカギを握る重要な人物は、「駐在巡査」と敗残兵グループで唯一の沖縄出身兵士であると、多くの人の証言から確信を得ていた。

エスカレート

「駐在巡査」は島人に恨まれるようなことをしていたので重い病気にかかっているとか、もうこの世にいないようだというようなことを言われていたので、もはや聞き取りはできないものだと思い込んでいた。

ところが、私の記事が掲載されるやすぐに電話を掛けて抗議してきた。驚くと同時に「ぜひ、話を聞かせてほしい」と頼み込んだ。

だが元「駐在巡査」は「よし、話そう、残波岬で会おう。暴力団同士が決闘した場所だ」と話すだけだった。彼の言う「事実とは異なる」事柄について話を聞き出そうとしても、まともに応じようとはせず、「証言者の名前を言え」の一点張りだった。

その後も「おまえに子どもがいることは調べてある。交通事故に気を付けることだな」などと、たびたび電話でプレッシャーをかけてきた。ついには私の両親の家に押し掛けた。

それを前触れに、直接私に会って決着をつけると、私の家に軽トラックで乗り込んできた。車の荷台には、先の尖った刃物類を積んで、真夏のカンカン照りの下、道路に止めたその車の横で2時間近く、押し問答となった。

さらに、「私の新聞記事を読んで身体の具合が悪くなった妻にもしものことが起きたら、ただちにお前を殺す」などと、脅迫の度合いは日を追ってエスカレートしていった。

刑事2人

これほどまでに激怒する原因をなんとか聞き出そうとしたが、「奥があるんだ、ムラの指導者層の中に裏切り者がいるんだ」と言うばかりで、「事実と異なる」という中身を語ろうとはしない。

一方的に、最終決着をつける日時と場所を決めて、道路に先の尖った鉄の棒をハンマーで打ちこんで去っていった。

私は「殺す」とまで言われたので、私が跡目である楊姓門中の会長に相談したら、教え子だという那覇署長のところに、一緒に相談に行ってくれて、そこで指定された日時と場所に、刑事を二人張り込ませるということになった。その日は、地域の戦争責任について論じた儀部景俊さん、『沖縄の日本軍』の共同執筆者の安仁屋政昭さん、大城将保さんにも来てもらった。

安仁屋さんと私が直接、元「駐在巡査」の抗議を受けることにした。2時間近く水掛け論が続いたころ刑事2人が飛び出してきて、「後は自分らが対応するから引き取るように」と言われた。半時間ほどたって、刑事2人が「『これ以上、脅しに来たらどうなるか分かっているな、自宅も調べてある』とくぎを刺してあるから、安心するように」と私たちに告げた。

いら立ち

このような経緯があったので、元「駐在巡査」の「ムラの指導者層の中に裏切り者がいる。事実とは異なり、奥がある」という言葉の端々には、隔靴掻痒のいら立ち、言いたいが言えないじれったさが感じられた。仮にそれが真実ならば、彼をかばうような、当時の状況を客観的に見ていた証言者をなんとしても探し出さないといけないと思った。そして75年5月の末頃、二人の証言者を見つけた。

二人の証言はこうだった。

「彼は戦争協力体制を強引におし進め、強制していき、ちょっとした違反でも許さずびしびし取り締まった。しかし、住民殺害に関しては、むしろ住民のだれもが情報提供者になりえたのだ」

「元巡査は伊是名部落から諸見部落に移ってきてからはなりをひそめたようで漁に出たりして、敗残兵らとも接触している様子も見られなかった。米兵殺害にも、住民殺害にも主導的に関わっているようにも見られなかった。むしろ主導的だった者は住民の中にたくさんいたということだ。彼は職務熱心な男で、権勢を誇っていたのは沖縄戦突入前までだ。直属の那覇警察署との交通、通信が途絶え、命令系統が途絶した以後はむしろさめた人だったと見うけられた」

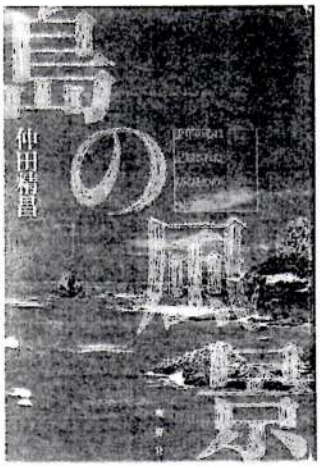
「元巡査はよくいえば当時としては立派な軍国日本の国民であり、悪くいえば直情径行型のファッショ的人間だった。当時よそ者は私を含めて3人いた。私は学校の教頭だったし、身の処し方を考えていたから、とやかくいわれなかったが、私の職業が巡査であれば、あの人みたいにいわれていたはずだ。彼は私の見たところ悪質には見えなかった。戦時中までは帝国軍人だったが、戦後は警察官らしいトゲトゲしさはなく丸味をおびてきた」

元「駐在巡査」は、事件にかかわってはいなかった。私は、彼がなぜ執拗に私を脅迫し続けたのか、その理由を突き止めることができた。別の表現を用いるなら私は彼から脅迫されることによって、事件の真相に近づくことができたのである。

では、なぜ彼がかかわったというような証言が出てきたのか。詳細については、次回以降に述べていきたい。この伊是名島虐殺事件について、島人自身の手による詳細な記録書が1999年9月に発刊されたのは、特筆すべき出来事である。仲田精昌著『島の風景―少年の心に記録されたもうひとつの沖縄戦』（晩聲社）がその書である。

（沖縄国際大学名誉教授）

（次回は2月15日）



仲田精昌「島の風景―少年の心に記録されたもうひとつの沖縄戦」（1999年9月）